

St. Luke's International University Repository

在宅ホスピス日米合同シンポジウム参加とホスピス 訪問（ハワイ島）:国際学会・セミナー参加報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川越, 博美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/419

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



が盛り込まれていた。発表された演題の中で注目を引いたのは、日本ではまだほとんど研究されていない、ストーキングに関する研究であった。まだアメリカでもあまり研究が進んでおらず、ストーキングの定義も様々だが、精神看護婦がストーキングの対象になりやすいという報告がなされていた。

この学会では、日本の学会とは異なる研究テーマやカンファレンスの内容、また参加者の活発な意見交換を目の当たりにするなど、多くの知的刺激を受けた。今後、欧米とは異なるシステムをもつ日本の精神看護の現状についても、積極的に意見交換していく必要があると感じた。

（精神看護学：岡田佳詠）

3. 在宅ホスピス日米合同シンポジウム参加とホスピス訪問（ハワイ島）

2001年度ミセスセントジョン記念基金の援助を受け、地域看護の教員3名（川越・長江・酒井）は9月4日から9日までハワイ島を訪ねた。ハワイ島訪問目的は、①在宅ホスピス協会が主催する日米合同シンポジウムへの参加と②ハワイ島にある3個所のホスピス（Hospis of Hilo・Hospice of Kona・North hawaii Hospice）との交流であった。日米合同シンポジウムでは、川越が「日本における在宅ホスピスケアの歴史と今後の課題」について報告し、ハワイからは、Kenneth Zersi氏（Director of Hospice Hawaii, board member of Hospis and Palliative Nurses Assosiation）が「米国における在宅ホスピスケア」の報告を行った。在宅ホスピスケアは専門的な看護であり、ホスピスケア能力をもった認定看護婦が必要であること。その能力は、在宅ホスピスケア基準にもとづいた実践能力として明示されるものであることなどが確認された。歴史の長い米国の在宅ホスピスケア実践と研究の蓄積は、われわれの研究テーマである「在宅ホスピスケアの標準化」に大きな示唆を与えるものであった。またホスピス訪問では、3個所のいずれのホスピスでも、ボランティアを含めたスタッフで暖かく迎えていただき hospitality を身をもって感じる事ができた。ホスピスケアが在宅サービスとして提供されていること、interdisciplinary team で実践されていること、地域住民を巻き込んだ活動であり地域のホスピスとして存在していること、またホスピスの責任者が大学院を終了した看護婦であり、リーダーとしてホスピスの管理・運営を担い、地域のネットワークづくりや政策的課題にも取り組んでいることなど、在宅ホスピスケアのみならず地域看護の在り方についても大きな示唆を得ることができた。

（地域看護：川越博美）

4. 北欧の社会福祉・教育視察研修に参加して

2001年8月21日～8月28日の日程でデンマークの教育と福祉に関する研修に参加した。デンマークで「胎内から天国まで」といわれている福祉、すなわち国民全体が健康で文化的な生活が保障されるとはどんなことなのか興味があった。答えは「もし障害者になった時、あるいは老人になった時、どのように処遇してもらいたいのか」ということに置き換えられ、「……してもらいたいことが、福祉で実現すること」であった。

今回の研修プログラムでは、幼稚園、養護学校、障害者施設、高齢者（デイケア）センター、特別養護老人ホーム（プライエム）を見学し、施設長や専門職の方々の話を聞いて質疑応答の後に、短時間ではあったが利用者の方々と交流ができた。共通していたことは、子供もお年寄りもみんなが、ほどよく五感が刺激され、あるがままの自然体で生活できていたことであった。歴史の流れの中で獲得されてきた自己決定を伴う「自由」、協同組合に端を発するお互いに助け合う「博愛」、早くから制度化された教育において人と比較して差別しない「平等」、これら3つの精神が現在の人々の文化となって受け継がれているからこ

そ実現可能なのだという。たとえ障害があっても、可能な限り、ない時と同じような生活ができること、すなわちそれぞれの人々に適した人生が送れることは、日本でも努力して目指しているところであるが、この課題は子供の頃からの教育があってはじめて解決されていくものであることを再認識させられた。

そのほか印象的だったことは、看護婦が高齢者の施設長や地域の訪問看護婦として活躍していること、各センターのすぐ近くに、そこを活用している障害者やお年寄りの1戸建てあるいはアパート形式の快適な住まいがあること、個々に合った良質の介護機器が活用されていることであった。

(老年看護学：久代和加子)